

平成25年度 栄東中学校入学試験問題

東大クラス選抜Ⅰ

〔国 語〕

受 験 番 号	
整 理 番 号	
氏 名	

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 試験開始の合図があったら、問題用紙と解答用紙のどちらにも**受験番号と整理番号と氏名**を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で17ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて**解答用紙**に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問事項があったら、だまって手をあげて
かんとく
監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、**問題用紙と解答用紙**は別々にして、整理番号順に監督の先生の指示にしたがって提出してください。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

こんなふうに考えてみたらどうだろう？ 時間には大きく分けてふたつの種類がある。ひとつは「自然時間」、もうひとつは「社会時間」。まず自然時間からみていこう。そこには、四十七億年ともいわれる地球誕生以来の歴史、四十億年ともいわれる生物誕生以来の進化の歴史といった、ぼくたちには想像することもできないほど長くゆつくりとした時間の流れが含まれる。生物は三十億年以上かけてやっと陸に上がり、恐竜たちの足元でうごめいていた哺乳類の中から現れた霊長類は、枝分かれの末に人類を生み出した。それはつい六百万年の昔。地球の歴史の中でいえば、ほんの一瞬のことだ。

自然時間には、産まれ、成長し、子を産み、老いて、死ぬ、ひとつひとつの生きものが生きる時間というものもある。また、山には山の、川には川の、海には海の時間というものもある。水は大きな時間の環の中をいつもゆつくりと動いているようだ。雨が降る。水の一部は土にしみ入り、時間をかけて地下水となり、やがてまた地面から湧き出し、小さな川となって大きな川へと注ぎ、しまいに海へと流れこむ。また、雨水の一部は蒸発し気体となって大気の中に戻り、やがて雲となり、また雨となって海や陸の上に降り注ぐ。地球上のあらゆるものは、生態系というシステムの中であって、お互いに密接に関係し、影響しあいながら生きている。生態系という時間の枠組み（エコロジー時間）の中にすべてのものが生きている、といってもいい。地球全体がひとつの生きもののよう存在だと考える科学者たちもいる。だから、エコロジー時間を「X」と呼ぶこともできるだろう。

もうひとつの社会時間の方はどうだろう。ぼくはこんなふうに考えている。人間は生きものの一種でありながら、高度に発達した頭脳を使って、自然界のさまざまな要素を資源として生存のために活用する方法をみ出し、また、言語という複雑なコミュニケーションの手段を使って、お互いが深く関わりあう社会というしくみをつくり出してきた。その結果、自然時間の枠組みの中にありながら、他の自然時間とは区別された、人間世界独特の時間である「社会時間」ができた。人間の集団が、自然の恵みをたくみに生かしながら自分たちの社会の存続をはかる方法を経済という。その昔、経済というものは自然の時間といかにうまくつき合うかという社会的な知恵だったのだ。

しかし、いつごろから経済は社会時間の枠組みから外れて、一人歩きするようになった。それまで自然時間の枠の中にあつた社会時間は、変化するとしても、自然のペースを無視したり、それに逆らったりすることはなかったから、変化のスピードはいつもゆるやかで、おだやかなものだった。しかし経済が一人歩きし始めると、次第にその時間は加速し、自然のペースを大きくはみ出すようになってしまった。

きみは気づいているだろうか？ ぼくたちが生きている現代の社会では、経済がまるで王様のように大いばりだ。「経済」の前ではみんなへいこらして、その横暴なふるまいにも文句をいわずに、おとなしくしている。経済という王様に仕えているのが、経済学者とか、エコノミストとか言われる人たちで、彼らの言うことはいつもほかの誰の意見よりも重要だと考えられている。ぼくは人類学者で、環境運動家だが、そんなぼくの言うことは、エコノミストの前では何の力もない。A ぼくが、自然や人間の健康をそんなうダムや道路や発電所の建設に反対すると、「経済のためには仕方がない」という一言で片付けられてしまう。たとえばぼくが、武器を売ったり買ったりすることに反対しても、「経済が成長するために必要なことだ」ということばですまされてしまう。経済のためには環境破壊も、健康被害も、戦争も「まあ、仕方ない」という、その経済とは、そもそもいったい何なんだろう。

B こんなど強大な力をほこる経済という王様には困った特徴がある。それは、成長し続けなければならない、ということだ。きみが生まれる前の日本の経済成長について、きみはきいたことがあるかな？ それはあまりにも急速な成長ぶりだったので、世界中から奇跡といわれるほどだったんだ。それと似たことが、今ではお隣の中国で起こっている。成長している経済にはお金が集まる。お金をもっている人たちが、お金を投資してそのお金をもつと増やそうとするからだ。経済の成長を支えるものに、技術革新がある。新しいテクノロジーをとり入れることによって、時間と人が節約できる。たとえば、券売機やICカードを使った検札機などが登場して、それまで切符を売ったり、チェックしたりしていたたくさんの駅員さんたちがいらなくなり、乗客はすいすいと改札口を流れるようになった（いらなくなった駅員さんたちがその後どうなったか、そして、節約されたはずの時間がどうなったのか、について考える人はほとんどいないのだが）。

経済が成長するということが、時間を省いてより短い時間で済ませるということとは、切り離すことができない。つまり経済成長のためには時間のスピードアップが必要だ。経済を中心にしたぼくたちの社会では時間がどんどん加速するように感じられるのは、

たぶんそのせいなのだ。

現在、人類にとって環境問題はもつとも重大な問題だ、とばかりは思っている。二十一世紀の後半へと向けて生きていくきみの世代や、きみの子どもたちの世代のことを思うと、本当に胸が痛む。どちらを向いても悪いニュースがいっぱいで、環境問題がこれからますます深刻になって人類の生存を難しくしていくとしか思えないから。

さて、その環境問題の最大の原因は経済なのだ。少なくとも、今頃たちが経済と呼んでいるものがこのままの横暴なふるまいを続けるなら、人類の未来は暗い。C なんとかしてみんなの知恵を合わせて経済のあり方を大きく変えていかなければならない。最近世界中で使われるようになった「持続可能な経済」ということばを、きみは聞いたことがあるだろうか。難しそうにきこえるけど、あたり前のことなんだ。D、破壊に向かって進んでいくデタラメな「経済」の代わりに、豊かな自然を保ち、人類の生存を続けていけるまともな経済をつくらなきゃいけない、ということ。そのための多くのアイデアは、自然の枠や社会の枠からはみ出して成長し、加速し続ける今の経済をスローダウン（減速）させることだ。E、どんどんスピードアップするようにつけられている仕組みをスローにさせることなど、はたしてできるのだろうか？

環境問題を時間の問題としてみることができる。まず地球温暖化についてみてみよう。地球の気候はこれまでの歴史の中で、氷河期や間氷期といった大規模な変化を繰り返してきた。でも、この百年に起こった地球温暖化という変化は、今までとちがって、ぼくたち人間の活動が引き起こしたものだ。ぼくたちが知るかぎり、地球はさまざまな生きものが生きていくのに適したただひとつの星。ほかの星と違って地球は、平均して十五℃くらいの暖かさに保たれている。それは、地球のまわりにはうすい透明の膜があつて、ちょうどぼくたちが着る服のように地球を包んでくれているからだ。このことを「温室効果」という。温室効果をつくる気体である「温室効果ガス」には、二酸化炭素（ CO_2 ）約六〇％、メタンガス（約二〇％）、フロンガス（約一〇％）などがある。地球を暖かく保ってくれる本来ならありがたい温室効果ガスが、しかし最近、人間の産業活動や消費活動によって急激に増えている。その結果、地球は今、ぼくたちが夏の暑い日にセーターやオーバーを着こんだような状態になってしまったわけだ。

要するに、経済時間がどんどん加速してきた結果、人間の活動が CO_2 などをはき出すペースがあまりにも速くなってしまった。

そして、本来なら大気バランスを整えて、ちょうどいい状態に保ってくれるはずの地球の仕事のペースが追いつけなくなってしまった。いいかえれば、経済時間が自然時間を追い越し、はみ出してしまったというわけだ。

（辻 信一「ゆっくり」でいいんだよ」より）

問一 線部 a～e の中から、他と違う種類の言葉を選び、記号で答えなさい。

問二 A E にあてはまる言葉として、最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア でも イ さて ウ つまり エ そのうえ オ だから カ たとえば

問三 X にあてはまる言葉として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 科学者時間 イ 人類時間 ウ 水時間 エ 歴史時間 オ 地球時間

問四 — 線部1「水は大きな時間の環の中をいつもゆつくりと動いているようだ」とはどういうことですか。最も適切なものから選び、記号で答えなさい。

ア 水は長い時間をかけて、存在する場所や姿を変えながら循環しゅんかんしているということ。
イ 水は生態系というシステムの中で生物と深く関係し、影響し合いながら生きているということ。
ウ 水は生態系という時間の枠組みの中で、一つの生きもののような存在だということ。
エ 水は自然時間に属し、生きものが生きる時間を循環させている存在だということ。
オ 水は山や川、そして海の時間をつかさどり、そこで生きものの時間を動かしているということ。

問五 — 線部2「社会時間」の説明としてふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「社会時間」の枠組みの中にあり、自然の恵みを生かしながら人間社会の存続をはかる知恵が、かつての経済であった。
イ 「社会時間」の変化する速度は、もともとゆるやかで、おだやかだったが、いつの間にか速くなってしまった。
ウ 「社会時間」は自然時間の枠組みの中にありつつ、他の自然時間とは区別されたものである。
エ 「社会時間」は人間が地球全体をひとつの生きものにとらえ、お互いが深く関わり合う仕組みとして生み出したものである。
オ 「社会時間」が自然のペースをこえて加速したのは、経済が自然時間を無視したことが原因である。

問六 — 線部3の「経済がまるで王様のように大いばりだ」と言うのはどうしてですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 環境破壊も、健康被害も、戦争も、強大な力をほこる経済のためには仕方がないとされているから。
イ 経済という王様に仕える経済学者やエコノミストたちが、横暴なふるまいをしているから。
ウ 人類学者や環境運動家も、強大な力をほこる「経済」に対しては文句を言うことすら許されないから。
エ 筆者の意見を王様に仕える経済学者やエコノミストに伝えても社会は変わらないから。
オ 現代の社会では科学、法律学、文学などよりも経済学がとて重要になっているから。

問七 — 線部4の「経済成長のためには時間のスピードアップが必要だ」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア お金を持っている人たちの投資により成された技術革新で効率化をはかり、時間を省くことで経済は成長するということ。
イ 成長している経済にはお金が集まるので、時間を省くことで技術革新が進み、人も節約できるということ。
ウ 経済成長には技術革新と時間と人の節約が大切なので、お金を持っている人たちがもっと投資をするということ。
エ 経済は今や強大な力をほこるので、お金を持っている人たちの投資により、社会時間がどんどん加速しているということ。
オ 経済を成長させ、技術革新を追求することでリストラや労働時間など、新たな社会問題が生まれているということ。

問八 — 線部5「人類の未来は暗い」とありますが、それはなぜですか。四十字以上五十文字以内で説明しなさい。

問九 ―線部6「持続可能な経済」の説明としてふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 破滅に向かって進んでいくデタラメな経済の代わりになるもの。
- イ 豊かな自然を保ち、人類の生存を続けていけるもの。
- ウ 自然の枠や社会の枠からはみだして成長できるもの。
- エ 加速し続ける今の経済をスローダウンさせることで得られるもの。
- オ 「温室効果ガス」の排出量に配慮するもの。

問十 ―線部7「経済時間が自然時間を追い越し、はみ出してしまった」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 経済の進歩が自然の進歩にかかる時間を抜き去り、余裕を感じさせるようになったということ。
- イ 経済時間が加速してきた結果、自然の進歩をさまたげて、経済だけが成長するようになったということ。
- ウ 経済時間が加速してきた結果、人間の活動時間が増えて、さらに経済を成長させるということ。
- エ 経済成長のための時間が地球環境の維持に必要な時間を越えてよけいにかかるようになったということ。
- オ 経済成長のための時間が地球環境の維持に必要な時間を十分に与えないほど加速したということ。

問十一 次のア～キの文が、本文の内容に合っていればAを、まちがっていればBをそれぞれ記入しなさい。

- ア 自然時間は長くゆっくりとした流れがふくまれる一方、ほんの一瞬のうちに人類を生み出した。
- イ 自然時間は四十七億年、社会時間は三十億年の時を刻んでいる。
- ウ 人間は生きものの一種でありながら、人間独自の時間を作り出した。
- エ 社会時間は自然時間の枠から外れて、経済という知恵を身につけた。
- オ 現代社会で時間が加速するように感じられるのは、経済成長をめざしてものごとを短い時間ですませようとしているからだ。
- カ 百年以上前の地球温暖化は、人間の活動によるものではなかった。
- キ 温室効果ガスは冬はよいが、夏になるとめいわくを感じる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

菊野脩は桜川北小学校の五年生。転校してきて初めての夏休みに、奥多摩のバンガロー村へ林間学校にやってきました。二日目にカヤック（スポーツ用の小型ボート）で川下りをしたのだが、脩をライバル視するクラスの優等生の手嶋は、どちらがカヤックを上手に操れるか勝負を持ちかけ、ひとり急流に乗り出していく。無茶だと思った脩は手嶋を追い、うまく誘導して、二人は無事に上陸することができた。

十キロ以上あるカヤックを肩にかついで運ぶのは不思議と重たく感じなかった。

と思ったのは最初だけで、すぐにずしり重くなった。手嶋と肩を並べ、a 歩く。

重さのせいもあって、ふたりとも無言だった。そりゃあ聞きたいことはあったけど、口を開く雰囲気にはならなかった。

「ごめん」と手嶋が言い出したのは、急流を崖の上からのぞむうほどうに入った時だ。巨岩の間にあるストッパーの泡立ちが、ちよど目に入った。

「自分でも無茶だとは思ってたんだ。でも、やめられなかった」

手嶋の目にはもうあの蔑むような色がない。

「いいよ。ぼくも同じだったから」

それからしばらく、また無言。

次に声を出したのも手嶋の方だった。

「菊野はどうして、あいつらとつきあってるんだ」

脩は立ち止まり、カヤックを地面に下ろした。

あいつらというのは、たぶんゴム丸と河童のことだった。

「別に理由なんてないけど」

「亀丸って少しおかしいだろ。河邑はともかく、菊野の足を引っ張ってるようにしか見えない」

「そんなことはない。友達の悪口は聞きたくないよ」

転校してきて、最初に仲よくなったのがゴム丸だった。脩みたいな転校を繰り返してきた子供にとって、すぐに話しかけてくれるある意味でお節介な子はいつでもありがたい存在だ。

「そういう意味じゃないんだ。亀丸と河邑がいいか悪いかじゃなくて、菊野って、あのふたりとは違うってことなんだ。菊野は自分では感じたことないのかなあ」

脩は首を横に振った。違うって、なにが？

「自分がどんな触れ込みで来たか知らないんだ。世界を股にかける自然写真家の息子。父親とずっと世界中を旅してきて、テレビに出たこともあれば、本や雑誌にも写真が出たりする有名人。始業式には間に合わなくて、一週間くらいたってからクラスに来た。その間、みんな騒いでた」

「テレビに出て、有名じゃないよ。それにテレビに出るのってつまらないよ。なんていうのかなあ、インタビューとかされていろいろ言っても、つぎはぎになって、なんか言いたかったことじゃないことを言わされちゃうみたい。やらせ、みたいなことだってあるし」

父さんと脩との旅をしゅざいしたディレクターに特にひどい人がいて、いろいろなやらせを仕込んで、後でばれて放送中止になったことがあった。脩はテレビが好きじゃないけれど、理由のひとつはその時の体験だった。

「それは菊野の考えだろ。うらやましいと思う人はたくさんいる」

「期待をうらぎってしまったわけ？ でも、有名なのは父さんで、ぼくじゃないから」

「でも、ぼくらの誰よりも、いや、ほとんどの大人なんかよりも、世界を見てきたんだろ。ぼくなんて、海外旅行をしたのはまだ赤ん坊の頃で、それもグアムだもん」

手嶋がそんなことを言い出すので、脩はおかしくなった。すごく自信があつて、脩のことを問題にもしていないように見えていたのに。

(中略)

「だから、菊野はぼくにとつて——」手嶋が言葉を句切った。「特別な転校生だったわけだ。(中略) なによりさ、ぼくが憧れてきたような生活をしてきた奴だし。でも、実際に見てみると、なんかイメージが違ふ……」

「チビだし、おちようし者だし」

「よく滑る冗談を言うし、勉強もまるでダメだし」

手嶋は言いながら笑っていた。手嶋にはわかっているのかもしれない、そういうのは実は、脩にとって心地よい「場所」でもあるのだってことを。

「で、ぼくはひどくがつかりしたんだけど、漫画が回ってきた時には驚いた。あれはすごいよ。ガツンってひっぱたかれた気がした。同じ学年でこんなかけるやつがいるのかって」

「そんなにすごくないよ」

脩は **b** 体を動かした。でも、これは恥ずかしがる必要なんてないと気づく。だって、あれは誰の手も借りずに自分で描いたものだから。

「漫画家になりたいの？」

脩はためらいながらうなずいた。

「そう簡単じゃないとわかってるけど」

「簡単じゃないからって、あきらめたりはしないだろ」

「もちろん……」

ちよつと口もってしまったのは、あきらめていないにしても、それでなにか努力をしているかと言われれば、特になにもしていないからだ。

「菊野は窓からいつも外を見てるだろ」

「あ、うん」

「ぼくも去年そうだった。たまたま窓際の席だった時、親水公園ばかり見た。川って本当におもしろい。今あそこを流れてる水って、一時間後にはもうずいぶん下流にあつて、たぶん一日か二日後には海だろ。でも、川はそこにある。見てるだけで、この場所が遠い世界とかにつながる気分になる。いいか、この先にあるのは東京湾だけど、でも、もつと先にアメリカやヨーロッパだってあるんだ」

「そうだよな」

脩にもそれはわからなくはない。でも、戸惑うのは手嶋がよく喋ることだ。本当によく言葉を知っている。たくさん言葉を知っているというよりも、どう言えば伝わるか知ってるというか。

「ぼくにもね、夢があるんだ」

「べんごしになる。違う？」

以前、そんなことを噂で聞いたことがあつた。

「それは、ぼくの母親が言ってること。ぼくがになりたいのはね——」

手嶋は効果を出すためか、言葉を切った。

脩は唾を飲み込んだ。すごく大事な秘密が今あかされようとしている。

「宇宙飛行士」と手嶋。「NASAに行つて宇宙飛行士になりたい。できればシャトルじゃなくて火星まで行くミッションに選ばれたい」

「それって……」

大きな夢というのか、それとも、現実的じゃないというのか。

脩だつて、宇宙飛行士というのが、今やれつきとした「職業」だと知っている。カリフォルニアにいた頃は伯父さんが宇宙飛行士の訓練を受けているというクラスメイトがいた。でも、すごいきょうそう率だし、それは漫画家になるよりずっと難しいことだと思う。

脩がそれと言つたら、手嶋はニヤリと笑った。

「難しいからやってみたいんだよ。去年、窓際の席で川を見てたらそう思えてきた。桜川は別の川と合流して海に注いで、その海にはもっとたくさんの川が注いでいる。というか世界中のすべての川が海に注いでるから、世界につながってるんだ。で、世界はまあ地球で、その外側にはまだまだ人が行ったことがない宇宙が広がってて考えると、自分がなんだか滑走路に立っているような気がしてきたんだよ。そう、川って滑走路なんだよ。いや、打ち上げ台って言った方がいいのかなあ。ぼくはもっと遠くへ行きたいんだ。今は桜川に住んでるけど、そこからもっと遠くへ。地球を離れて、行けるとこまで」

手嶋が柄にもなく紅潮しているのに気づいた。脩は手嶋の早口についていくのがやつとで、目が回った。

「誰にも言わないでくれよな。笑われるような気がするから」

「なんでぼくに言ったの」

手嶋はニヤリと笑った。

「菊野にはいつも腹をたててるからだ」

「どうして」

手嶋は無視してカヤックをかつぎあげ、歩き始めた。脩はあわてて後を追った。

まだ先は長い。下ってきた時間は全部あわせても十分に満たないけれど、歩きではどれくらいかかるだろうか。カヤックを持っているとはてしない距離に思えてくる。

「ちよつと」と手嶋に呼びかけた。

いったんカヤックを地面に下ろして、二艇を平行に並べる。手嶋が船首、脩が船尾に立って、艇の前後についている運搬用のヒモに手を掛けた。ちよつとたなかのような要領でふたりで持ち上げると、重さは変わらなくても安定してずっと楽だ。

このやり方になれて余裕ができると、手嶋はまた話し始めた。

「菊野はやればできるはずだろ。勉強だって、一度も本気出してないだろ。こっちには目標があって必死にがんばってるのにいつもふざけて勉強ができたって大したことないって思ってる？ それって、考えてみればバカにされてるようなもんじゃないか。いや、本当にバカにしてるよ。ムカツクー」

手嶋は脩のことが **c** ならなかったという。できるのに、やらない。先生に睨まれても **d** 受けてふざけたりしているのを見てみると、なぜか自分が否定されてるみたいで腹が立つ……。

最後の方になると、手嶋はほとんど笑い声になっていた。

「ほんとうに、ぼくは菊野のことがうらやましい。バカだと思いかもしれないけど、あんなふうになんて思っただろ。な、バカみたいだろ」

「それ、ぼくのことバカにしてんじゃないの」

ふたりは大笑いした。

とにかく、手嶋が脩に投げかけていた視線。あの謎が解けた。

手嶋がこんなふうに見ていたなんて、脩は信じられない気分だった。

ふと河童の言葉を思い出した。

「手嶋君ときつくくんは、似た者同士」

7 案外そうなのかもしれない。

(川端裕人『川の名前』より)

*1 ストップパー……流れがうずを巻いているところ。

*2 ゴム丸と河童……同級生の亀丸と河邑。

*3 親水公園……校庭のフェンスの向こうに続いている公園。中央を桜川が流れている。

*4 きつくくん……菊野(脩)のこと。

問一 線部ア～コのひらがなを漢字に直しなさい。

問二 — a — d — に入る言葉として最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a	ア きびきび	イ こそこそ	ウ すたすた	エ とほとほ	オ ぶらぶら
b	ア ふらふら	イ こわごわ	ウ くねくね	エ じりじり	オ もぞもぞ
c	ア いじらしくて	イ うとましくて	ウ たよりなくて	エ もどかしくて	オ わずらわしくて
d	ア さらりと	イ するりと	ウ どかつと	エ あたふたと	オ さつと

問三 — 線部1「脩は立ち止まり、カヤックを地面に下ろした」とありますが、脩がこのような行動をとったのはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア カヤックの重さにたえられなくなったから。
イ 手嶋と並んで歩くことがつらくなったから。
ウ 自分を見下すような雰囲気を感じたから。
エ 友だちのことを悪く言われたと感じたから。
オ 二人の友だちのよさを伝えようと思ったから。

問四 — 線部2「脩はおかしくなった」とあるのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 手嶋が突然、赤ん坊の頃の話や、観光業のさかんなグアムの話をはじめたから。
イ 手嶋の海外生活へのあこがれを、自分がこわしてしまったことに気づいたから。
ウ 手嶋が小さなことで脩を引き合いに出し、おくれをとっていると考えているから。
エ 手嶋の普段のふるまいとは逆に、本当は大人を見下していることがわかったから。
オ 手嶋の自信にあふれた様子が、実際は自分の弱さをかくすためのものだったから。

問五 — 線部3「紅潮している」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 若く元気な様子が表情に表れている。
イ 興奮して顔に赤みが差している。
ウ 恥ずかしさで顔がほんのりと赤くなる。
エ 目が回るほど感情が高ぶっている。
オ 夢を追う真剣な顔つきになっている。

問六 — 線部4「自分」とありますが、どのような自分ですか。文末が「～自分。」につながるよう、本文から十五字で抜き出しなさい。

問七 ―線部5、6「バカみたい」とありますが、それぞれ誰のことを「バカみたい」だと言っているのですか。その組み合わせとして正しいものを選び、記号で答えなさい。

ア	5 菊野	6 菊野
イ	5 菊野	6 手嶋
ウ	5 手嶋	6 菊野
エ	5 手嶋	6 手嶋

問八 この物語の中で手嶋は「川」をどのようなものとしてとらえていますか。四十字以内で答えなさい。

問九 ―線部7「案外そうなのかもしれない」とありますが、脩はどのようなところが手嶋と似ていると思ったのですか。本文全体の内容をふまえて十五字程度で答えなさい。

問十 この物語の説明としてまちがっているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 脩と手嶋が実際に経験したある日の出来事が、脩の立場から語られている。
イ うわさの中で語られる脩と、実際の脩の違いがわかるように表現されている。
ウ 会話文が多く、脩と手嶋が次第に心を通わせていく過程が理解できる。
エ 心情の描写から脩が誰にも理解できないふくざつな心を持つことがわかる。
オ 級友である手嶋の目を通して、脩がどのような人間かだんだんわかってくる。

解
答
用
紙

Downloaded At: 11:53 11 September 2009

受験番号

整理番号

得点

A	

B

C

D

E

F

G

H

I

J

[illegible][illegible]